

2. 研究の詳細

プロジェクト名	戦前戦後の日本における器楽指導実践のための教員研修に関する研究		
プロジェクト期間	平成 27 年度		
申請代表者 (所属講座等)	山中和佳子 (音楽教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	無し
<p>1. 研究の背景と目的研究の目的</p> <p>昭和初期の学校音楽教育に焦点を当て、小学校教師の音楽技能及び指導力向上に関する研修の特質及び学校音楽教育における表現領域の指導の実態を検討し、当時求められていた教師の音楽的専門性と器楽活動の実態を明らかにする。</p> <p>現在、免許更新講習や各地域での音楽研究会が数多く開催されている。筆者がその会の講師を務める中で、強く求められることが器楽や歌唱の学習を支えるための教師自身の演奏技能を向上させたいということであった。これらに端を発し、音楽科における現職教員の研修がこれまでどのように行われてきたのかを検討することを通して、日本の学校教育が今日まで求めてきた教師力の変容や連続性、音楽教育と教師の音楽的専門性の関係性を明らかにしたいとの考えをもった。本研究では、特に教科として広く音楽の指導が行われるようになった昭和初期に着目し、現職教員を対象としてどのような研修が行われていたのか、そこで器楽に関してはどのように扱われたのか、また教師に求められた音楽的専門性について検討したい。</p> <p>2. 研究の内容と方法</p> <p>本研究では、中心的研究課題として昭和初期から国民学校令が発令されるまでの時期の日本の音楽教育に関する教員研修に焦点を当て、教員研修や教育に関する情報共有の手段と実態の全体像を把握する。また教科と課外活動における音楽教育に着目し、(1) 教員研修を支えた教育団体の設立と事業内容の特質 (①日本音楽教育協会の設立と雑誌の発行, ②学校音楽協会の設立と雑誌発行, ③ブラスバンドに関する団体の成立と雑誌発行), (2) 教師を対象とした音楽講習会及び研究会の試み (①中央(東京)における音楽講習会, ②地方における音楽講習会, ③授業研究を目的とした研究会), (3) 音楽教育に関する座談会と器楽に関する内容, (4) ブラスバンドに関する研修会の内容について検討する。</p> <p>文書資料の蒐集については、国立国会図書館, 東京藝術大学附属図書館, 国立音楽大学附属図書館, 東京文化会館音楽資料室にて, ①戦前の音楽雑誌『学校音楽』『教育音楽』『ブラスバンド』『音楽倶楽部』『音楽教育研究』等に掲載された, 教員研修や吹奏楽, 器楽活動に関する資料, 器楽活動に関する書籍を精査した。</p> <p>3. 研究成果</p> <p>(1) 教員研修を支えた教育団体の設立と事業内容の特質</p> <p>①日本音楽教育協会の設立と雑誌の発行</p> <p>大正 9 年, 高等女学校での音楽科教授時間を削減するという文部省の通達に対し, 危機感をもった音楽教育関係者たちが, 大正 11 年に東京音楽学校卒業生で構成される同声会(現在も東京藝術大学同声会として続いている)の役員や学校教師を中心に構成した日本音楽教育協会を設立した。日本音楽教育協会は, 日本の音楽教育の発展を主眼とした教育研究団体の先駆けであった。この協会によって, 学校音楽教育に関する情報を中心とした雑誌『教育音楽』が発行されることとなった。この『教育音楽』は, 現在も学校音楽教育に関する知識や情報を発信する代表的な雑誌として発行されている。この協会の事業は, 次の通りである: 教育音楽に関する諸問題の研究, 音楽会講習会並に教育音楽の普及に関する施設, 会報の発行, 会員の互助, 其の他本会の目的に必要な事業。この協会の設立と音楽教育に関する事業の試みが, 戦前の日本の学校音楽教育に関する授業研究や技術の向上指導を促進することの大きな要因となった様相が見られた。</p> <p>②学校音楽協会の設立と雑誌発行</p> <p>昭和 8 年には, 学校音楽研究会によって音楽教育専門雑誌『学校音楽』が発行されるようになった。この学校音楽研究会の役員は日本音楽教育協会の役員とも関連があるものの, 理事長は井上武士等の小学校教師が務めていた。この研究会は雑誌発行の他に「学校音楽座談会」「名士に物を聴く会」「研究授業の発表会」等を行って</p>			

おり、「学校音楽座談会」の内容については全て雑誌に掲載している。また、雑誌の毎号に唱歌科の授業案や教材解説を掲載しており、唱歌科授業の質的向上に取り組む姿勢を強く打ち出していたことが見て取れる。

③ブラスバンドに関する団体の成立と雑誌発行

学校における課外活動としてのブラスバンドについては、雑誌資料を見る限り大正14年に広島県立府中中学校にて清水範一教諭が、昭和3年には関東の府立第一商業学校の教員であった廣岡九一が勤務校で設立したことが報告されており、課外活動としてのブラスバンド活動の開始期は、大正後期から昭和初期頃と推測される。その後、昭和6年の満州事変を契機として、社会人や学校現場、特に中学校や商業学校を中心としてブラスバンド活動が促進されている。

このように、学校現場の教員や会社によってブラスバンドが個別に編成され始め、彼らが主となった管楽研究会によって、昭和8年に日本で初めてブラスバンドの専門雑誌『ブラスバンド』が発行された。その後この雑誌は、『ブラスバンド喇叭鼓隊ニュース』『吹奏楽：ブラスバンド・喇叭鼓隊ニュース』等、名前が変更されながら昭和18年まで継続して発行されている。これらの雑誌を活用し情報提供、情報共有、意見交換が行われるとともに、昭和9年には東海地方でアマチュアブラスバンド東海連盟が結成、昭和11年に全関東吹奏楽団連盟と全関西吹奏楽団連盟が相次いで結成、その後昭和14年11月には全国レベルの機関として大日本吹奏楽連盟が結成された。また、学校教育方面では東京でブラスバンド活動を行っている小学校が連携して、昭和11年に東京市小学校吹奏楽連盟を発足させている。

(2) 教師を対象とした音楽講習会及び研究会の試み

①中央（東京）における音楽講習会

大正時代から師範学校附属学校が授業研究発表会を開催したり、武蔵野音楽学校が音楽講習会を開催したり文部省が音楽講習会を東京及び「地方の都会地」で行ったりしていた。大正時代の文部省の講習会では、主に声楽であり、器楽や楽理などの項目は副科的に扱われていたという記録が見られた。

現存している雑誌記事から、昭和初期の中央（東京）で開催された音楽講習会の内容を検討した。昭和5年には、文部省が「高等小学唱歌」が発表されたことを受けて「文部省高等小学唱歌講習会」が東京音楽学校で3日間にわたって開催されている。その講習内容は、「高等小学校唱歌全歌曲の練習及び取り扱いの研究並びに発声法の指導、歌詞其他についての講演、音楽演奏会、唱歌実地授業参観」である。定員250名のところ350名の参加があり、当初の見込みより盛況であったようである。

昭和5年頃からは、日本音楽教育協会と東京音楽学校がバックアップした音楽講習会が非常に多く開催されるようになった。昭和5年9月には東京近郊小学校教職員の実力向上を目的とした「長期音楽講習会」が、東京音楽学校の教授を講師として9月から12月下旬までの毎週土曜日に開講された。その講習内容は、唱歌指導法、発声法、唱歌練習、ピアノ練習であった。この講習会は、多数の希望により継続開講することになったが、1月から引き続き開講された内容は「和声学及び作曲法、発声法及び唱歌練習、ピアノ練習」となっており、前回より教師個人個人の音楽知識や技能を高めることに重点を置いたことがわかる。

この他にも、冬期音楽講習会や夏季音楽講習会が全国の教員を対象に始められ、昭和6年に行われた冬季音楽講習会を見ると、「唱歌、ピアノ実技、唱歌指導法」の講習が5日間にわたって行われている。唱歌指導法では、東京音楽学校講師であり小学校等でも非常勤教員を務めると同時に、日本の鑑賞教育の発展に寄与した草川宜雄が指導にあっていた。

②地方における音楽講習会

中央で講習会が盛んになった同年の昭和5年頃から、地方の各県や市においても地域の教育会などが中心となった音楽講習会が開催され始めている。例えば、福島市では昭和5年の秋に長期音楽講習会第1回目が開催され、第2回目は昭和6年6月6日から7月25日まで長期間開催された。この講習会は、音楽教育の振興に必要な「教育的識見の確立」と「音楽的力量的優越」を目指して開催された。中でも、教師の音楽的力量的不足が痛感されていたようであり、長期にわたって勉強できる場を作ることの必要性が指摘されている。第2回の講習会の内容をみると、中央から有名な音楽教育者を招いておらず、福島県師範学校の教員や男子・女子師範学校附属小学校、福島第四小学校などの現地の教師たちが講師となっていた様子が見て取れる。講習内容は、次の通りである：声楽（基本練習、合唱）、小学校の教材練習、小学校の唱歌教授法の研究（附属小学校の唱歌主任による体験談、市内各項の実地授業見学と批評研究）、「名曲」鑑賞、器楽に関しては、「器楽研究、これはただ今計画中」とある。この講習会実施に伴い、教員合唱団も設立された。より良い音楽教育を行うためには「より

よい音楽演奏に努力することによって音楽芸術的体験をいやが上にも高めなければならない」との意図によって毎週開催を予定しており、教員たちが自身の音楽経験を増やし歌唱能力の向上を図ろうとしていた様子が見られる。

福島市の他、岐阜県でも昭和6年に初等教育音楽の研究を目的とした「岐阜県東濃音楽研究会」が設立されている。講師は、岐阜男子師範学校の教員が務めており、毎月1回第1日曜日に開催された。昭和7年9月の報告によると、80名ほどの小学校教師が参加していたようである。講習内容は、午前是新尋常唱歌の歌い方と取り扱い方及び和声学、午後は児童に対する「実地取り扱い方」と合唱であった。この研究会でも福島市と同じく、合唱は非常に人気が高く熱心に取り組んでいる様子が報告されている。

地方が自主的に行った講習会や研究会とは別に、日本音楽教育協会が東京近県に講師を派遣して行った講習会もあった。昭和7年ごろから試みられていたようで、東京から土曜日曜にかけて往復できる近県を対象としており、「土日唱歌講習会」と呼称されていた。講習内容は、日本音楽教育協会が編纂した新尋常小学唱歌を教材として扱う発声法が主な内容であった。

③授業研究を目的とした研究会

昭和7年頃から、音楽実技講習を伴わず授業見学と協議を中心とした音楽教育研究会が、雑誌記事にしばしば報告されるようになってきている。東京では昭和7年10月に東京府女子師範学校附属小学校にて「唱歌教育研究発表大会」が行われた。【表1】は2日目の公開授業の概要である。表1にあるように、この研究会では児童による作曲の学習が試みられている。第1日目は唱歌を主とした授業が行われており、いずれの日を見ても幼稚園の補助のみの器楽の扱いにとどまり、生徒による器楽学習に主眼を置いた公開授業は行われていない。

富山県では、「富山県初等教育研究会研究大会」が昭和7年9月に開催された。3日間行われたこの研究会では、研究発表、附属実地授業参観、講演、児童学芸会などが行われ、講演には東京音楽学校声楽科の教授であった船橋栄吉が講師として招かれた。この研究会では、中央から声楽科の教授を招きつつ音楽実技の講習を含んでおらず、富山県の各区域の教師がテーマをもって研究発表することが中心となっていた。

また、昭和11年には仙台市では仙台市教育会と仙台市小学校唱歌研究部主催の「第一回小学校唱歌教育研究発表大会」が開催されており、期間は1日間のみであったが、定員150名のところ当日「四百もの熱心な先生あり」というほど盛況な会となったようである。大会内容は、「実地授業参観、質疑、講評及び講演、研究発表、協議題討議、小学校児童唱歌実演」であった。会場は、師範学校附属小学校ではなく、昭和7年から開催された児童唱歌コンクールで女子が優勝した仙台市南材木町尋常小学校で行われた。協議は「小学校唱歌教育上特に努力すべき事項」という協議題にそっており、唱歌教育の「目的、教材選択、指導方法、設備、教師のあり方」について行われた。指導方法に関しては、発声や読譜力、聴く態度を養うこと、変声期児童の扱いについて等が検討されるとともに、鑑賞の内容や音楽的基礎力の育成が検討されている。しかし、楽器を用いた学習についての言及は行われておらず、全体を通して専ら唱歌に関することが研究の中心に置かれている。

以上述べたように、昭和5年頃には音楽実技力を向上させるための講習会が各地で行われていたが、声楽やピアノを扱った内容がほとんどであった。また研究会においても、鑑賞に関する内容や作曲の試みはなされていても、楽器を使った授業報告は見ることはできなかった。

(3) 音楽教育に関する座談会と器楽に関する内容

講習会や講演会だけでなく、音楽教育の問題を中心とした座談会の開催を願う現場からの要望を受けて、学校音楽研究会は昭和9年末から各地で学校音楽教育に関する座談会を開催するようになった。【表2】は、今回の調査で得られた座談会の概要である。地方での開催にあたっては、東京から座談会のリーダーを向かわせるとともにその宿泊費用は学校音楽研究会が負担するなどして、師範学校や小学校の教員の座談者と傍聴者を募ってお

【表1 吉田照十方 (1932.11) 『教育音楽』 p53より抜粋】

高 女	尋 六 女	尋 五 女	尋 子 男	学 級	
岩 崎 訓 導	中 村 保 姆	田 中 訓 導	加 藤 訓 導	中 村 保 姆	教 授 者
/		空 (児 童 作 曲)	陶 工 祐 右 衛 門 (藤 井 清 水 曲)	ピ ア ノ (富 原 幽 詩)	教 材
		幼 彙 隊 演 奏 の 補 助 法 指 導	共 同 作 曲 の 批 評	視 唱 に よ る 歌 い 方 練 習 指 導	共 同 作 曲 指 導

り、地方の負担を減らしつつ多い年には毎月様々な地域に出向いていた様子が見られた。

昭和9年11月に東京品川区立会尋常小学校にて開催された第1回目は、歌唱についての内容がほとんどであり、器楽についての言及は見られなかった。しかし、第2回目では、楽器を使った活動について、変声期の子どもに「明笛バンド」(明笛と大太鼓・小太鼓を混ぜた合奏)をさせるといいのでは、という意見やハーモニカを学校の音楽教育に取り入れることの難しさ(家庭での理解が得られない)についての見解が述べられている。また、第3回目では、ブラスバンドについて、管楽器の指導に困難を感じているといった意見が見られた。第5回には、当時楽器を用いた音楽学習に熱心に取り組んでいた上田友亀が出席しており、比較的長い時間を割いて楽器の活用がリズム教育に役立つといった器楽学習の有効性について議論されている。このように、全体の議論内容を見ると、テーマとして器楽の活動が提示されることはなかったものの、それぞれのテーマの中で楽器を用いた活動について多少は議論が交わされていた様子が見られた。

【表2 学校音楽研究会による座談会の概要】『学校音楽』に掲載された資料を元に筆者が作成

回	年月	場所	主催(または「賛同」)	議題名(あるいは内容の概要)
1	1934/11	東京品川区立会尋常小学校	学校音楽研究会(以下、本会)	及び教材選択の態度
2	1934/11	長野市芹田小学校	長野市音楽研究会	現代音楽教育の欠陥と救済策
3	1934/12	甲府市穴切尋常高等小学校	山梨県音楽協会	学校音楽の社会化
4	1935/2	大阪市久実小学校	大阪府天王寺師範学校内友声会	現下及び今後の音楽教育
5	1935/5	市川市市川尋常高等小学校	市川尋常高等小学校	唱歌(教材選択、基本練習の興味化等)鑑賞(放送、レコード等)、創作(児童の独創)等
6	1935/7	青森市立新町尋常小学校	本会	中央の音楽一般の傾向、学校放送時間、低学年のリズム、日本精神と唱歌、発声法等
7	1935/10	東京市麹町区内幸町大阪ビル	本会	最小限度の教材 機械音楽と学校音楽の関係
8	1935/12	高田市高田師範学校講堂	本会 上越音楽研究会	音楽教育の目的、教授要旨に対する最近の研究
9	1936/7	岐阜県女子師範学校記念館	本会	音楽教育の目的観、教材選択と取り扱い、唱歌教授の新傾向、楽譜教授の取扱等
10	1936/9	仙台市東六番丁尋常小学校	宮城県教育会、初等教育学会	音楽能力優秀児と劣等児の取扱、現代音楽教育の欠陥とその救済、学校音楽と社会音楽の接近
11	1936/12	福井市会議事堂	福井県音楽教育研究会	音楽教育の目的論、鑑賞教育に関する問題、音楽教育に於ける体系の樹立、音楽教育の振興策等
12	1937/2	高崎市中央小学校	高崎市教育会	児童が喜んで音楽を学習する実際案、都市小学校に於ける音楽教育の設備等
13	1937/10	静岡県榛原郡藤川小学校	本会	音楽教育の再検討、時局と音楽
14	1937/12	名古屋市中ノ町尋常高等小学校	名古屋市唱歌研究会	歌詞の取扱、時局と唱歌教育、絶対音感の問題等
15	1938/1	盛岡市教育館	盛岡市教育会	軍歌と学校教育、絶対音感の問題、唱歌の成績考査、設備と教育、発声の問題等
16	1938/2	福島県師範学校	福島県教育会	時局と音楽教育、実際指導上の難点及び疑問点、音楽指導に於ける生活化、興味化等
17	1938/3	長岡女子師範学校	長岡市教育会	児童の叫声発声や変声期について、設備なき学校の鑑賞指導、唱歌制度に関する現行制度等
18	1939/5	愛知県安城第一尋常高等小学校	曙唱歌会	音楽教育の本質的目的と楽譜指導、時局と音楽教育、教材に関して、唱歌の基本練習、発声等

(4) ブラスバンドに関する研修会の内容

(1) で述べたように、昭和初期から少数の中学校でブラスバンドが編成されるようになった。今回の資料調査でブラスバンドに関する研修内容が見られたのは、昭和8年12月に開催された日本教育音楽協会主催文部省・東京音楽学校後援の中学校教員音楽講習会である。5日間の内わずか3時間ではあったが、講師に海軍軍楽

長内藤清五を招き「スクールバンドの組織及指揮法」の内容が組まれている。

昭和初期の学校教育でブラスバンドよりも盛んに編成されるようになったものに、喇叭鼓隊がある。これは、陸軍外山学校がピストンのついていない大中小のラッパを編成して考案したものであり、ブラスバンドよりも編成費用が安く、演奏技術も簡易であることから、中学校のみならず小学校でも編成されるようになったのである。昭和 9 年には喇叭鼓隊を主とした講習会が北海道で開催された。また、小学校教師を主な対象者とした講習会や研修会にも、喇叭鼓隊に関する講習内容が昭和 11 年ごろから見られるようになっている。昭和 11 年に日本教育音楽協会が開催した夏季音楽講習会では、「ラッパ鼓隊基礎教練」としてラッパと大小鼓の内容が見られる。このほか、当日の講習には、喇叭鼓隊のための指揮の研修もあった。太鼓の練習にはスティックで机をたたいて練習したようであるが、ラッパに関しては参加者の多くをカバーできる数が用意されており、実際に楽器の音を出して講習を受けていた様子が見られた。

このように、小中学校で管楽器や太鼓を用いた演奏団が様々に編成されつつあり、生徒の教練に、また士気の鼓舞を目指して活動の試みがなされるようになってはいたが、誤った解釈で演奏している団体もあるという事実から、これを解消しさらなるブラスバンドや喇叭鼓隊の発展を目指して、昭和 8 年頃から地方及び東京で唱歌の指導内容とともにブラスバンドの講習内容も講習会で取り上げられるようになった。

(5) 終わりに

昭和 5 年頃教師に求められていた能力は、唱歌を歌う技能とピアノ演奏技能、及び唱歌教材の分析力であり、まずはこれを向上させることが目指されていた。その後、それらを基盤として授業を構成し効果的な指導言を用いる授業力を向上させようとしたことがわかる。また、授業内での器楽学習に関しては、本研究で焦点を当てた昭和 10 年ごろまではほとんど視線が向けられることはなく、数名の先駆的实践者が音楽教育に意欲的な教師に情報を提供していたことにとどまっていた。また、昭和 8 年以降、音楽教師の役割として課外活動で行うブラスバンドや喇叭鼓隊の指導力も意識されるようになったことがわかった。

4. 今後の予想される成果と展望

唱歌教育の研究はこれまで多くなされてきているが、教師の音楽技能及び指導力向上を目指した研修会の実態に焦点を当てた研究はそれほど多くはない。この研究をつづけることにより、唱歌科から国民学校令による芸能科音楽へ移り変わる際に現場の教師に求められた専門性、及び現在も行われている教員研修との連続性を明らかにできると考えられる。特に芸能科音楽への移り変わりには、器楽活動に関する学習内容が明記されたことから、教師に求められた専門性は変化したのではないかと推測される。この研究を基盤として音楽に関する教員研修に関する史的研究の一端を担う研究として調査分析を続行し科研費の獲得へつなげていきたいと考えている。

引用文献

吉田照十方 (1932.11) 「地方通信 東京・女師・附小 唱歌教育研究発表大会について」『教育音楽』 pp.52-53。